

善照寺  
寺報

# ぜんしょうじ

第4号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺  
電話 四七(三五七)二二三二  
FAX 〇四七(三九七)一三二一

## 寺宝を紹介した

### 特別号を作りました

善照寺住職 今岡達雄

「秋の日はつるべ落とし」と申しますが、夕方、川端を散策していると太陽の沈むのが日々早くなっていくのが良くわかり、何かもの悲しささえ感じられる今日この頃です。皆様お元気でしょうか。



毎年十一月三日には市川「市民まつり」が行われており行徳駅周辺でも催し物が行われています。これとは別に「街回遊展」という市内紹介イベントが行われています。これまでに市川地区、大野地区、本行徳地区、中山地区、本八幡街地区で回遊展が行われてきましたが、十一月二日(土)、三日(日)の二日間、「市民まつり」と同時に行徳街回遊展が開催され、善照寺も協力することになりました。

善照寺会場では、本堂で寺宝を公開します。また会館では市内の伝統工芸作家の作品が展示・即売されます。「江戸つまみかんざし」「飾り煙管」「木象嵌」「木工工芸」などが展示される予定になっています。このような機会に檀信徒の皆様にも善照寺の寺宝を紹介しておこうと考え、寺報の特別号を企画した次第です。天保年間(一八三〇年)に発行された『江戸名所図絵』という本があります。地誌風の読み物でいまでも言う旅行ガイドブックです。行徳に関しては行徳四丁目「行徳船場」弁天公園の「辨財天祠」「善照寺の古鈴」行徳三丁目「八幡宮」。行徳一丁目「神明宮」「海巖山徳願寺」「塩濱」「甲宮」「了極寺圓光大師鏡御影」の十ヶ所が紹介されています。寺の数でみると、善照寺、円明院、自性院、徳願寺、了極寺の五寺院です。善照寺は

江戸時代後期の旅行ガイドブックに載るぐらい有名なお寺だったのですね。江戸名所図絵には次のように書かれています。

古鈴一口 湊村青暘山善照寺といへる淨刹に収蔵せり。芝増上寺に屬す。開山は覺譽上人と號す。慈覺大師彫造の觀音、湛慶の作の焰王、又法然上人鑑御影と稱するものあり。

残念ながら、先々代今岡達雄上人が善照寺に入ったときには、この「古鈴」は既に逸失していたようです。しかし、幸いなことに江戸名所図絵に書かれている「聖觀音菩薩像」「焰王(閻魔大王)」「法然上人鑑御影」は現存しています。この他江戸名所図絵にはのっていない寺宝も有りますので、今回は寺宝の解説を中心に寺報をお届け致します。

(合掌 住職記)

【縁起】

青陽山慧日院善照寺は下総國東葛飾郡八幡莊行徳湊村の武士であつた青山四良兵衛正貞の寄進によつて本蓮社覺誉上人善照潮隨和尚により三縁山増上寺の末寺として寛永二年（一六二五）に建立されたと伝えられている。寺号「善照寺」は増上寺法主了の大僧正より、山号「青陽山」は増上寺法主遵誉上人起屋大僧正より、青山という姓にちなんで賜つたとされている。潮隨和尚は武州小松村の出といわれており元和七年（一六二一）法然上人自作の座像（鏡御影像）を負い関東に下つたとされている。

房國を目指した。しかし風向き悪く下総國湊村に流れ着いた。青山浄故入道（六四歳）、伊予守家貞（十六歳）であつた。父浄故入道は健康状態を害し薬石効なく他界したため湊村に定住することになった。青山伊予守家貞は浦安堀江村の中村驥生の娘を妻とし野武士となり4人の子をもつけた。善照寺は四男四郎兵衛正貞が父伊予守家貞の菩提を弔うために建立したとされている。

青山四郎兵衛正貞は相州小田原北条氏直の家臣である青山伊予守家貞の四男である。伊予守家貞は豊臣秀吉の小田原城攻めにより落人になり、父青山浄故入道、家臣嶋田右衛門、太郎兵衛兄弟と共に房州里見の丸屋東条に身を寄せようと思ひ海路安



【寺宝】

聖観音像

慈覚大師円仁（比叡山延暦寺第三代座主八六一年寂七十一歳）の作といわれる。一九九八年修復。胎内から願文が発見されましたが、施主・仏師名ありませんでした。



閻魔像（焰王像）

湛慶（鎌倉時代の仏師、運慶の子供）作といわれる。一九九八年に修復。胎内

には願文 仏師名等は発見されませんでした。



法然上人像

法然上人ご自身の作といわれる。鏡に映して作つたことから鑑御影（かがみのみえい）と称している。開山覺誉上人が武州小松村から背負つて来たもの。



千手観音像

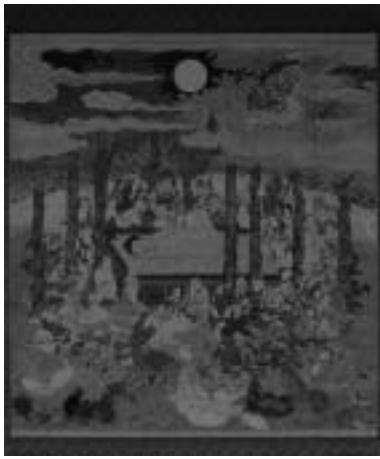
行徳三十三所観音札所は元禄三年（一六九二）、本行徳徳願寺の十世覺誉上人によつて開創されたものとされている。覺誉上人は観音像三十三体を作り、一体を徳願寺に三十二体を三十二カ寺に安置したとされている。善照寺は二十四番札所で、この千手観音がその時安置され

たものといわれている。当時の観音像で現存しているものは少ない。一九九八年に修復した。胎内には願文も仏師名もなかった。



大涅槃図

お釈迦様の入滅を表した図。安永年間（一七七二〜一七八）に作成されたもの。施主は青山司郎兵衛。大正二年（一九一三）修復したと記録されている。大変大きなものである。



観経曼陀羅

観無量寿経の内容を絵にして示したもの。作者は善照寺十四世神誉上人、天保十三年（一八四二）の作と示されている。



二十五菩薩来迎図

善照寺第三世直誉（一六七二〜一七九）代に作られたもの。作者未詳。天明四年（一七八四）、大正二年（一九一三）平成八年（一九九六）修復。阿弥陀仏の臨終来迎を現している。



利剣名号

阿弥陀仏の仏智を鋭い剣に喩えて「利剣」という。また、南無阿弥陀仏を書きしめたものを名号というが、鋭い剣のような文字で書いたものを利剣名号という。弘法大師の作といわれている。



五智如来像

五智とは法身仏大日如来の智慧を表すもので法界体性智、大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智のことである。真言密教では大宇宙の真理を象徴的な仏として示しており、これが大日如来である。大宇宙の真理は、智の面を金剛界大日如来、理の面を胎藏界大日如来が示している。また、大日如来は真理そのものであるから直接触れることは出来ず、その働きは種々の仏を通して私達にもたらされるとされている。

大日如来の智慧は金剛界の諸

仏によって示され、大円鏡智（現実世界の全てのものを映し出す智慧）は阿闍如来、平等性智（現実世界の全てのものが平等であること知る智慧）は宝生如来、妙觀察智（現実世界の全てのものを正しく見極める智慧）は阿弥陀如来、成所作智（現実世界の全てのものを活性化する智慧）は不空成就如来、法界体性智（大もとの智慧、上記四智で示される）は大日如来で示されている。本来は大日如来を中心に東に阿闍如来、南に



宝生如来、西に阿弥陀如来、北に不空成就如来が配置される。善照寺の五智如来は右から阿閼如来、宝生如来、大日如来、阿弥陀如来、不空成就如来となっている。特徴は下表の通り。光背（仏様の後ろの舟形したもの）の最上部には各仏様を示すマーク（種子）を見ることが出来ません。

善照寺の五智如来は、當寺開基の青山四郎兵衛正貞の子息である、青山四郎兵衛吉貞によって、万治元年（一六五八）二月十五日に青山家有縁の諸霊の供養のために建立されたもので、元は善照寺墓地の中央に安置されていたが、平成二年（一九九〇）二月墓地整理のために現在地に遷座した。大日如来光背背面に左のように書かれている。

當寺開山覺譽上人代  
下総國東葛飾郡八幡莊行徳湊村  
青山四郎兵衛吉貞  
造立五智石像為百億万遍念佛供養

仏	種子	智慧	方位	持物	手印契
アシュク 阿閼如来	𑖀	大円鏡智	東(右)	金剛	触地印
ホウショウ 宝生如来	𑖆	平等性智	南	宝	与願印
ダイニチ 大日如来	𑖇	法界体性智	中心	五鈷	智拳印
アミダ 阿弥陀如来	𑖉	妙觀察智	西	蓮華	定印
フクウジョウジュ 不空成就如来	𑖊	成所作智	北(左)	羯磨	施無畏印

梵鐘  
鐘棟棟札に拠れば、鐘樓梵鐘とも元文二年（一七三七）二月十二日に造営された。その後鐘樓は弘化三年（一八四六）五月、昭和三年（一九二八）四月

に改修されている。

梵鐘は當寺第二十世根誉代に太平洋戦争戦時供出により逸失した。現在の梵鐘は昭和三十年（一九五五）に、同第二十世根誉上人が新鑄造したものである。鑄造師は人間国宝香取正彦師である。百二十貫。梵鐘の撞座（鐘をつく場所）は通常二ヶ所であるが、この鐘は四ヶ所と特殊なデザインとなっている。また、梵鐘には序文、銘文が鑄込まれている。通常序文は散文形式（通常の漢文）で書き、銘文を韻文形式（韻を踏んだ漢詩）で書くことが多いが、この梵鐘では全て韻文形式で書かれている。序文、銘文は善照寺二十世今岡正道上人の作、揮毫は清岸寺中村恭祐上人である。

漢語燈録

宗祖法然上人がお書きになったものを集めたもの文集を『燈録』と呼んでいる。法然上人入滅後六十二〜三年を経て収集されたもので、和文で書かれたものを和語燈録、漢文で書かれたものを漢語燈録と呼んでいる。和語燈録は一三二一年に刊行されたが、漢語燈録は一七一五年に刊行されるまで専ら書写によって伝えられていた。一七一五年義山上人によって知恩院から刊行された漢語燈録は義山上人の大幅な校訂を経たもので、これ以降のものを義山本、以前のもものを古本（恵空本）と呼んでいる。古本書写本は浄土真宗大谷大学の古本と、善照寺所蔵の善照寺本の二つしか現存していない。





## お山での修行(二)

「おまえたちの中で、本当に阿彌陀さまを信じられる者は、おるか」

その指導員の言葉に、誰ひとり手を挙げませんでした。

確かにそれまでの一週間、阿彌陀さまに関することをたくさん学びました。はるか昔、法蔵菩薩がいたこと。念仏する者を救うとお誓いになって、阿彌陀さまとなられたこと。だから私たちが「南無阿彌陀仏」とお念仏をとなえれば、死後は阿彌陀さまの国「極楽浄土」に連れて行ってもらえること。そこで永遠のやすらぎを悟らせてもらえること。

すべて、おとぎ話としか受け止められませんでした。死んだら細胞の栄養がなくなると、脳の働きも止まり、分解されてなくなるのです。

「まあ、安心した。そんなにすぐに阿彌陀さまを信じられた

ら、こつちも驚くな」


そして、仏前で南無阿彌陀仏を合唱しながら、ひたすら立ちたり座ったりを繰り返す、一時間の礼拝(らいはい)がはじまりました。汗

だくになり、足もがくがくになりましたが、私は結局、阿彌陀さまを信じることはできなかったのです。


僧侶の修行はどうしても、お経の読み方などの技術に注目が置かれてしまうものです。阿彌陀さまを信じるという課題が得られたことは、幸いでした。

研究にもどってからも、時々考えました。しかしどうにかして阿彌陀さまを信じなくては、という思いから、阿彌陀仏や浄土について理屈をこね回すことに終始していました。

話は二年半後。三回目の夏は



## 仏さまからの手紙



知恩院。暑い京都の夏でしたが、先生たちの講義を熱心に聞く余裕に恵まれました。

先生方の中でも、話の端々からご信心がうかがわれることがあります。その姿を見た私は、「阿彌陀さまが信じられなくてもいい。阿彌陀さまを信じることを勧めている、法然上人という人間を、信じてみよう」という思いに到ったのです。

法然上人のお言葉の中で印象に残ったのは、「自分はまちがいになく極楽に往生する(決定往生)けつじょうおうじょう」という気持ちでお念仏を唱えなさい」というお言葉です。

私は「決定往生」の気持ちになろうとして念仏することになりました。しかし知恩院にいた三週間、家に帰ってから念仏を続けましたが、決定往生の気持ちにはなれませんでした。

その年の冬は、浄土宗の僧侶をつくりだすための伝統儀式の

ため、研究を中断して芝の増上寺に三週間こもりました。

講義はひとつもなく、大昔に決められたことをただ行う三週間でした。私は、決定往生の思いになりきれないまま、ただ念仏を唱えていました。

それでもやはり、決定往生という思いは体験できませんでした。そのまま、戒を授かり、教えを受け継いだことになって、私は一人前の僧侶として扱われるようになりました。しかし法然上人の教えをほんとうに受け継いでいるとは、お世辞にも言えないままの私でした。

それでも師僧や母をはじめ、お檀家のみなさんも、私が「一人前」になったのを喜んでくれました。これでいいのだろうか、と思つたものです。

修行の話はこれで終わります。信じるということがわかり始めたのは、もっと後でした。

(副住職 達彦)

あわれみの大慈大悲のちかいは もらさでよよぞてらす寺かな

(阿弥陀仏の大なる慈悲である本願にあるように、

誰一人漏らさず救いの光で善く照らし出す寺であるよ)

光明はすがたに影のそうごとく 直なる人を善照てら

(阿弥陀仏の救いの光は人の姿に影が寄り添っているように

素直な人々を善く照らし出す)

行徳観音札所には各札所(寺院)にふさわしい詩歌がつけられているようです。第廿四番である善照寺には、右にある二首が伝えられています。いずれの詩歌も「阿弥陀様の教え」と寺の名称である「善照寺」を巧みに組み入れた秀作です。

今回は、寺宝を特集しました。この善照寺には宝物がいくつもあります。そして代々の住職はその宝を守り続けてきたのです。そのお陰で保存状態も良く皆様に寺宝を紹介することが出来ました。四百年の歴史の重さを感じずにはおれません。ここには掲げることが出来ま

せんでしたが善照寺にはもう一つ大切な寺宝があります。それは善照寺の檀信徒の皆様です。寺を守るうする皆様方のお力なしには宝を守ることが出来ないからです。

この歌に恥じないよう、そして今までそうであったように、これから阿弥陀様の教え・法然上人のお念仏の教えを伝え、独り残らずその光で救われる寺であるように努力するつもりでございませう。今後ともご協力を給わりますようお願ひしまして特集の最後の言葉と致します。

南無阿弥陀仏

善照寺第廿一世進誉達雄

## 事業報告

大施餓鬼会 八月十七日、法話に林田康順師をお迎えして奉修しました。大勢の参加有り難うございました。

法伝寺様本堂落慶式 十月十四日お隣の法伝寺様で本堂落慶式が行われ、当善照寺本堂で御願の後、お練り行列が出発しました。好天に恵まれ大本山増上寺御法主、大本山清浄華院御法主のご臨席のもと、盛大な落慶法要が奉修されました。

## 訃報

お盆以降お亡くなりになった檀信徒の方々は次の通りです。皆様もご一緒に冥福を祈りませう。

八月七日 古谷ふみ子様

喪主 蒲田本町古谷 一様

十月五日 高山 芳純様

喪主 駅前四 高山初恵様

## 編集後記

あまり広く一般には知られていませんが、浄土宗では仏式結婚を行っています。先日、私の友人が浄土宗大本山増上寺で結婚式を行い、私も参列致しました。偶然ではなく、選り選ばれて結ばれた縁を阿弥陀如来に感謝する。そして、生涯の伴侶となることを如来の前で誓い合おう。さらに、仏教徒として、また念仏者として共に生きてゆくという誓いを、如来の前で誓う。仏式結婚式の厳かさや華やかさの中で夫婦となることを誓い合った二人の清らかな姿がとも心に染み入りました。

実は私達副住職夫婦も二年前に増上寺で結婚式を行いました。久しぶりに増上寺の阿弥陀如来にお念仏をして、そのあたたかい顔を拝見しながら、誓いを立てた日から頑張っています、と心の中でそつと報告しました。合掌(副住職室久美英)